編集後記

紀要第二輯には研究論文三篇、ほかに新設の「論壇」の欄、第一輯の「追憶」を改めて「天窓」の欄を設けた。会員諸氏が語る自由放談のいわば談話室であるが、加藤博士の「直言直行」の意をとって、会員相互の親睦をはかり連絡の書信となる投書箱である。附録に「三條教則・関係資料」の続篇を掲げた。

巻頭論文岡田米夫氏の「伊勢神宮相殿神の成立考」は、神宮の相殿神奉斎の由来について考証された新研究である。相殿神とは主神を中心とし、主神と関係の深い神々を同一殿に奉斎した神々を申すが、それには神縁関係によるもののほかに、主神に奉仕した祀官の地縁関係によるものがある。この関係を史実に徴して究明されたもの。氏は最近『海国日本の誕生』という著書を刊行された。つぎの梅田博士の「神道教学のゆくえ」は、博士年来主張の〝組織神学〟をまとめられた雄篇である。戦後、宗教法人として再発足した神社界には、未解決の課題が多く残された。(1)神社の歴史、伝統保持の問題(2)氏子・崇敬者の教化問題(3)神道教学のあり方(4)神社施設、運営の近代化(5)大社・名社・小社との格差の問題がそれである。本稿は主に上記(3)にかんする論説である。博士はこれからの神社界は戦前の「祭祀の厳修」だけでは不十分であると見なされ、醇熟した宗教としての神社の内容を備えて前進の必要性をとかれ、そのための条件を縷々詳細に述べている。終わりに「神道教典」編集の方法論にふれて原理門、応用門とにわたり、その見解を発表している。第三の照沼好文氏の「水戸烈公の生祀と御陰講」は、加藤博士の著書を精読し、新しい視点から、栗田寛博士撰文「仰景碑」の一文に着目、水戸常磐村農民の御陰講成立の事実に結びつけて烈公生祀の信仰を裏づけた注目の論文である。「天窓」欄には会員青柳潔氏の「学労窟回顧」と望月真氏の「乃木坂の一夜」の二篇を収めた。（小林）

久保田収氏（皇学館大学教授・文博）

本会正会員久保田収氏は昨秋以来病気療養中のところ薬石効なく、ついに昨年十二月七日伊勢市伊勢総合病院で帰幽された。享年六十六歳。十二月十一日午後大学葬が同大体育館で執行され、全学一体で教授の遺徳を偲び深い哀悼の意を捧げた。教授は戦後復興された皇大の文学部長として、学長を援けて皇大の再建のため激職にありながら教育と研究に全力を振るわれ、皇大の学風を造成した中枢的学者で、神道研究の第一人者、「中世神道の研究」「神道史の研究」はその代表的名著といわれ、多数の俊才を育成した功績は大きい。教授の遺著「北畠父子と足利兄弟」（A5三七二ページ）も今春皇大出版部から刊行された。ここに謹んで教授の長逝に対し深甚の哀悼の意を表する次第である。

神道研究紀要〔第二輯〕
昭和五十二年五月三十一日発行　会費年一、〇〇〇円
東京都渋谷区代々木神園町一―一
明治神宮教学部内
編集兼発行者　加藤玄智博士記念学会
代表者　伊達巽
振替口座　東京九―四二五九三番
印刷所　明徳印刷出版社